

# （4月号） 保育雑誌より

## 保育の手帖

年間保育計画が臨時増刊として発行され、四月号には、年間保育計画の四月細案と解説が大半を占めていて、ここに主力を

おかれていることがわかる。前年度に毎月の保育案が連載されていたが、新年度のはじめに当って年間保育計画を増刊号にしてくわしく挙げられたのは、実際によい参考となる。これだけのものをまとめるに当っては、本誌の保育案研究委員の並み並みならぬ努力があつてのことと思う。

保育案それ自体もよく考えてみるべきであり、戦後十年余りを経過し一応試行錯誤の段階もすぎ、再び根本問題として検討する時期がきているのではないだろうか。

この保育案は、幼児の発達を常に考慮し

て組まれたもので、内容も「集団生活の発達」「上の発達に応じた教育の狙いと指導の要領」「計画の具体化と六領域に分けた指導の重点」にわかれている。それも発達心理学的根拠の上に立ち、さらに具体的に子どもの動きに即してかかれており、とかく保育案というと、学校での單元を扱うようになりがちなのに対して、よき警告ともなろう。

三木安正氏は、幼児教育のねらいを、集団生活の指導を通じて、その自己中心性を社会化の方向にもっていき、社会人として自律性のあるパーソナリティの芽生えを養うというところにおこうとする、と述べられ、また、幼稚園教育の目標としては、学校教育法第七十八条の五目標を具体化していくために、どのような教育の場をつくる必要があるかということを考えることが、幼児教育の中心的課題であると考え、五目標がどのようなグループの中のどのような子どもでは、どのように進められていくか

というプロセスを見守り、そこに指導の筋をつかむことが幼児教育研究の急務であり、この線にそって、この保育案も計画されているということを述べている。

四月号には、四月の細案と各経験領域にわたってそれぞれ保育案研究委員がくわしくかいておられる。

三木安正氏の「上手な保育者」は一読を要するであろう。

## 保育の友

新学期がはじまった。四月という月は、私どもの過去の足どりの反省のエポックでもあるし、希望にみちた将来の設計の時期でもある。しかし、おうおうにして、私どもは追憶と夢を追うのに忙しく、現実をきびしく見つめることを忘れがちである。保育の友「四月号は特集として、保育の現実と問題点をざぐり、その解決を読者に訴えている。

まず、読者からたくさん通信や訴えを

もとにして、宮下俊彦氏が「保育の現実と問題」という見出しで、五つの領域にま

めている。1、施設の問題（部屋が狭すぎ  
る。保育室がひとつで、三歳児から就学前  
までの子どもをいっしょに保育している。

この二年間、紙芝居というものは一部も購  
入していない）2、家庭の問題（家庭の貧  
困、愛情の飢え、家庭の不和が問題児を作  
っている）3、保育従事者の問題（保母

の欠員、突然の退職、管理者の無理解な干  
渉）4、保母自身の生活（生活の不安定、  
疲労）5、研究活動（雑談的な研究会など  
読みかえすたびに保育上の障害が山積して  
いて、とりつくしまもない思いにつまされ  
る。

それらの諸問題について、数人の識者た  
ちがそれぞれ現実を一步ひきあげるための  
解決策を提案している。「貧しい現実の中で  
の努力と工夫」（宮下俊彦）「家庭の要望室  
にこたえるには」（早川元二）「外に向っ

ての働きかけも」（秋田美子）「担当児童

数は制限したい」（副島ハマ）「運営の合

理化をめざそう」（増子とし）以上の諸氏

の論がそれである。しかし、そうした保育

条件の不備だらけな現実にもめげず、地道

にすばらしい実践成果をあげている熱心な

保育者の姿がある。父母の勤労を助ける気

持で、何から何まで保母たちの手でやって

きた。（栗林茂子）一五〇人全員に歯みが

きを楽しく実践に移した。（加藤智恵子）思

ったことを十分に話せない子を話せるよう

にした。（安達光子）などの実践記録がそれ

である。保育計画とその解説の記事は毎月

号のことながら参考になる。特に、三歳児

保育の具体例はすぐに実践に役に立つ。あ

そびのページ欄は、今月号は小学校の菱沼

太郎氏の劇あそびのひとつのあり方、があ

って新鮮味が出た。「保育と政治」という、

どのように保育関係の子算ができるかとい

う論文は、この雑誌の性格をあらわした記

事として適当であると思われる。

## 幼児の指導

四月はじめに当面する悩みの一つ「問題

児を集団保育の中でどう導いたらよいか」

が取り上げられている。テンボのそろわな

い子ども、家庭で甘やかされた子ども、集

団場面で場おじが強くひっこみ思案の激し

い子ども、自分を意識することが強くひっ

こみ思案で失敗を気にする子ども、自分を

意識することが強く他人に認められたくて

自分勝手にふるまう子ども、あきっぱい子

ども、乱暴な子ども、自分の要求を通すた

めに泣きわめく子どもなど、問題児を、実

際にどう扱ったかを、経験を通して書いて

おられるので一読をおすすめしたい。

「遊び場のない子ども」東京都大田区の場合

について、神崎清氏がのべておられる

が、これは単に大田区の場合だけではない

と思われる。本当に安全で自由な社会的環

境構成—遊び場を中心とした子どものため

の町づくりの仕事が一日も早く実現されるように願って止まない。

相場なお子氏の「世界の子どもたち」は今月はイギリスで、イギリスの幼児のしつけや教育の様子がわかり興味深い。子どもには子どもの世界があるというイギリス人の考え方、他人に対する思いやり、また友だち同志のローヤリティの養成がイギリスで大そう目立つ教育の仕方であることなど、大いに学ぶところがあつた。

## 幼児と保育

「まとはずれの保育をつく」

——正しい軌道にのせるために——  
——というのが本号の特集である。

幼児教育の現場に強く浮かび出ているいろいろの問題、その一、都会地の幼稚園に見られる現象であるが、有名小学校入学の隘路のあたりを受けて、早くわが子を利巧にとあせる母親たちの、字を教えて下さ

い、教を教えて下さいと訴え要求してくるこの声に、さてどのような処理をし、説得をしたらよいのか。その二、世の中がおちついて、ぎりぎりいっぱい生活にある程度のゆとりができた結果であろうか、近時、バレー熱、ワイオリン熱、ピアノ熱、童謡熱、絵画熱……等善意に解釈しての才能教育の潮の襲来で、幼児教育の担当者たちは悩まされることが多い。これらの問題について。その三、ゆうぎ会を楽しみに待っているからたびたび催して欲しいという母親に対して、その正しい在り方をどのように説くか。その四、幼稚園に預けたからには何もかもお任せいたしましたと手ばなしでいる家庭に対して……

まず本号では以上のような現場の問題について、この道の指導者や識者が懇切な指導や説明を加え、その正しい在り方を述べながら、正しい軌道にのった幼稚園教育はどのようなものであるか、幼稚園は何をするところかといった、いわば幼稚園教育の

「いろは」を解明してくれる。四月の年度始めの号にふさわしい編集ぶりである。

その他、叱ってはいけないか、子どもの質問には誠意を持って、幼児テストの正しい理解と技術、たのしい保育室づくり、保育の実際に生かす視聴覚教材、幼稚園教育の六領域、など、幼児教育者にとって興味ある読みものぞろい。とくに本号からは父母と母親のための映画鑑賞教室が新設されて、波多野氏の心理学的解説が掲載されている。読み出すと止められない惹きつけぶりである。

## 保育ノート

新しい子どもたちを迎え、また幼稚園などでも新しい先生を迎えることが多いこの四月に当って、普段の生活で幼児に一番関係のあるわれわれ教師自身のいろいろの問題をとり上げています。

私たちは、自分自身のこととなると、何かと忙しさにとりまぎれてしまうことも多いし、また、普通に処理してすごしていることが、ひとりよがりでは、はたからみたくにそれが適当でない場合がある。こういう事柄は、たとえ気がついた人があったとしても、われわれが気がつくように、いつてくれることは期待できない。そこで新学期に当って、この号に書かれた「保育者のことばづかい」「保母の服装あれこれ」「保母のエチケット」などの各項目について、静かに考えてみることは大変意味のあることだと思ふ。

特に一頁の牛島義友氏の「保母の心がまえ」では、目に見えない、形にあらわれないう心もちの問題をとりあげ、教師という名前では、一面で教師の性格がつよくなってきたおそれはないだろうか。保育者で最もよい教育者といえる人は、母親的性格をもった人こそそれである、といえる。といい、さ

らに、「母親的性格とは」「教師の性格について」「保育者の性格について」でそれぞれ細かく述べられている。

最終頁の保母のまど、という欄では「保育用品の管理になやむ」という日頃われわれが困っている問題を提出され、松村康平氏が「二つの場合が考えられる」と解答をよせている。

## 保 育

今月の目次をみると、年少児（三歳児）の保育について一部とりあげてあることに目をひく。

守屋光雄氏は理論の方から、田中千鶴子氏は現場の立場から、述べられていることは、興味深い。

もちろん、守屋氏は、年少児保育の重要性、必要性、教育効果とくわしく述べられ、三、四歳になると基本的習慣もほぼ確

立し、大まかな全身運動も一応発達し、言語も、表現も、他人との交渉も一応幼稚園生活に入りうるまでに発達してくるから、この機をとらえ、子どもの欲求と発達にそ

くして家庭教育の欠陥を補い、家庭と協力して保育を行うと一年保育より望ましい結果が生れる。特に、人格方面において好ましい人間形成が行われるため、青少年期になって問題をもつものが少いことを述べ、幼稚園ずれとか生意気とかの世の中の考えに対し、自信づけられた同感の理由で皆さまでに購読をおすすめする。

一方、田中氏は三歳児保育の経験を通しその苦勞なざったこと、難点など指摘され、現場のものには参考になる。

いろいろの幼児の例もあげられているが、三歳児というものは特別であり、守屋光雄氏がいわれたように、家庭の保護をまだ受ける時代であるから、教育的意図はあるが、その扱いはもう一歩考えなくてはな

らないのではないだろうか。教師の三歳児に対する見解のたりなきて幼児を問題児扱いにするのはかわいそうだ。三歳児保育は

むずかしい。世の中に叫ばれてきただけに、もっともっと研究し三歳児というものを

を知ることである。そして後計画をたて実践するので、現在、幼児の水準が高められてきた。というのは幼稚園の先生が高めて

しまったようだ。が三歳は三歳児の発達しかしていかないのだからその点、四歳、五歳から押した三歳児では困る。この田中氏のご経験にヒントをえて、大いに三歳児保育をもっともっと研究し、むずかしいものにするのでなく適切なものになりたい。よきヒントを与えられたようだ。

## 月刊保育カリキュラム

今月よりこの本の編集が東京に移行され  
たらしく、編集委員の方々は、武田一郎、  
平井信義両氏を中心に張切って筆をとって

いられるのが、文章を通してよくうかがえる。

・山下俊郎氏の「望ましい教師の姿」は、よい先生となる資格八項目について述べられていて、新学年度を迎えるわれわれ保育者にとって（新しきも旧きも）心構えを示唆され、心の紐を結びたくなる。

・武田一郎氏の「子どもの成長とカリキュラム」は、幼稚園のカリキュラムの無、有論に対しどこまでもカリキュラムの必要のべていられる。ただカリキュラムという

と硬いが、小学校のような教科カリキュラムでなく、あそびのカリキュラム、すなわち、よい経験をもたせるための保育者の心の準備としての意味である。

・山村きよ氏の「年間計画と目標設定について」は、二、三年にわたりとこの幼稚園でも見られる子どもの実態より取りあげられていて、注目すべきは四、五歳と、三歳

と、たて方を別にとりあげたことだ。四、五歳は教育要領に基き六領域に分けて考えられ、三歳は年齢が小さいだけにもっと融通性のある案、すなわち生活の中からのような保育を誘い出すかという点に工夫をこらした点だ。

## ・四、五歳児の指導として

四月のこどもの姿、生活指導、健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作、両親教育、について各々幼稚園生活の第一歩として過す四月の指導を、具体的にかかっている。

## ・三歳児の指導としては

発達と特徴、保育技術（家庭から幼稚園への移行、あそびの導入）理想的な保育環境、母親への指導、として、それぞれ詳細にのべられていて、とかく迷いがちな三歳を受持つ保育者に指針をあたえてくれる。